

曲 目 解 説

今年もまた暑い夏がやってきました。西高OBオーケストラへようこそおいで下さいました。

今年の一曲目は、久しぶりになつかしのフィンランディアです。バルト3国もきな臭くなっておりませんが、改めて冒頭の不安定な和音と、平和へのいのりを込めた美しい中間主題を味わって下さい。何しろスタンダードナンバーですので、特に不安定な和音は得意中の得意であります。(簡単すぎたかな?)



続いて本日のメイン、ブラームスの一番であります。はっきりいって私、この曲を初めてやりますので、解説などというおこがましいものは書けません。ちょっとした感想など書いてみましょう。

まず冒頭ですが、力が入ってるんですよこれが。彼の2・3・4番はソーッと始まるのに、全オーケストラでのテュッティ、それも不安定な半音階での上昇に、ティンパニが響き渡っている。いかにも「オレのはじめての交響曲を聴いてくれ。」という念の入りよう。つづいて高まる分散和音の第一主題に、またまた半音階の第二主題、それだけでよしておけばいいのに、静かになったと思ったら、地の底から弦楽器での「ゴジラ……ゴジラ……」の登場。どうもこの楽章の全体は大変つかみにくいようです。次の第2楽章はまだ分かりやすいホ長調ですが、ブラームスのAdagioって、どうしてこうつまらん旋律なんですかね。ほんとにつまらない。ただオーケストラ全体でやると、何というか構造的な美しさがあって、個々の旋律のつまらなさをおおって渋い魅力がでてくるというのが、ブラームスのよさでしょう。コンマスのソロに注目。第3楽章になると大変分かりやすくなります。気持ちよさそうなクラリネット氏のおおらかな音にお浸り下さい。ブラームスのAllegrettoは、2番もそうですが、実に美しいものです。そして第4楽章、オケ全体がジタバタしながら、ホルンの(これアルペンホルンの模倣だそうです)呼び声を導き、(お待たせしました)トロンボーンのコラールと続いて、有名なハ長調の第一主題、これが実に分かりやすい。所が第二主題はまたまたまた半音階の訳の分からないテーマ、このパターンが2度繰り返され、ブラームスという人が理解出来なくなってきた所で、最後のコーダでハデに終わります。名曲……なんでしょうかねえ。この曲の本質に、たった3日でどれだけせまれたか、ヴァイオリンだけは沢山います。みんな4楽章を弾きたいばかりにワラワラと集まってきました。さあ「ブラームスはお好き」とはなりますでしょうか。